

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

第7次復興支援に参加して

大船渡の海沿いにおりたった時、まず私の目に飛び込んできたのは、畳だった。激しく損傷し、線路横の地面に突き刺さっていた。波にのまれたその畳には大量の泥が付着し、どこの家にあったものなのか、どんな家庭にあったものなのか、判別できなかった。しかし、その畳には、人がその上で生活してきたという雰囲気があった。誰かがそこに座り、食事をし、寝ていたはずなのだ。畳だけではない。川の水にさらされている本も、粉々になった子ども用のコップも。大船渡の町にある被災したすべてのものに、歴史があった。この場で、この地で、たしかに育まれてきたはずの様々な歴史が、震災によって、流されてしまったのである。



数字やテレビの映像でしか知らなかった震災が、圧倒的にリアルなものとなった。震災を抽象的なものとして捉える事が出来ていなかった。被害状況を表す甚大な数字や、流れてくる映像が震災のすべてだと思い、被災した方々の感情や悲しみに、本当の意味で思いを馳せることはほとんどなかった。教員という職業柄『助け合おう』という言葉を生徒に投げかけてはいたが、その言葉には、なんの重さもなかったのである。私自身が、震災にむきあえていなかったのだ。



少しでもなんとかしたい。その思いを持ち、復興支援に臨んだ。浸水した家の泥出しや家具の片付け。物資の仕分けや、壁の洗浄。側溝の泥出しなど、活動内容は様々であった。

2ヶ月以上たった今でも、大船渡には、やらなければならないことがたくさんあった。しかし、人手は全く足りていないという状況であった。支援物資の保管場所となっている体育館は、支援物資は溢れているものの、それを仕分けし配給する体制が出来ていない状態であり、側溝の泥出しでは、泥が飽和状態にあるものの、処理はなかなかすすんでいないという状態であった。

そのような中で、私は自分の力の小ささを感じた。なんとかしたいという思いが強くなればなるほどに、それは強くなった。被害状況があまりに大きくて、私には、復興の道が見えなかったのである。家に対する支援も、仕分け作業も、泥出しも、どれを行っても『被災地の力になっている』という実感はほとんどなかった。側溝の泥出しをしている時などは、『この区画だけの泥出しをしたところで意味はあるのか』と自問するほどであった。



それは、私が、『つながる』ということ意識していなかったからである。

私たちが行える支援は、一人ひとりでは、大きな力を持ちえないかもしれない。しかし、大船渡の人々や7陣のメンバーと話し、BCに掲示してある1陣から6陣のメッセージを読み、私は気付いた。私たちの支援は、これまでのたくさんの人

たちの支援や思いの上にあるものであり、そして私たちが出来る小さな支援を、誰かが受け継いでくれる。つながりは支援の輪となって大きくなり、復興への気持ちは続いていくのだ。

大船渡を襲った津波は、この地が培ってきた長い長い歴史を流してしまった。しかし、その歴史は、消して途絶えてはいない。被災地をもう一度元気にしようとする現地の方々や、復興支援にくるボランティアの方々がいる。日本各地からの支援物資があり、世界から励ましの便りがある。小さなつながりが、大きなつながりになる。みんながつながることで、歴史は続いていく。決して、途絶えることなく。



【支援物資が保管されている体育館】



【第7次ボランティア派遣メンバー】